晩秋〜季節は過ぎゆく〜
楽曲コンセプトとアナライズ

寄　　ゆかり*

Late autumn ～passing season～
Composition concepts and analyze

Yukari Yori

【キーワード】アンサンブル，キーボード，習得，表現
ensemble，keyboard，acquistion，expression

四季を感じられるこの日本という風土の中で，秋から冬にかけての季節の移り変わりに心地よい季節があると感じている．どの季節が好きか，と問われると，私はいつも答えに迷ってしまう．四季の中にあるのだが，それは四季には表せない四季である．その季節は，私の中では次のように感じている．

水の中に二色の溶いた絵の具を，少しずつ落としていく．落とす速さも一定でもよいだろう，逆に時には早く，時には遅くなることもあるだろう．それはそこに携わっている人の，心の赴くままにできればよい．すると，急ぐわけでもなく，急に色が濃くなるわけでもなく，徐々に水面の色は変化する．それはじっと見ていてもわからない．しかし一日前，いや一時間前と比べてみれば，変化はわかるであろう．確実に変化していく…．

そのような季節が，「晩秋」だと感じている．

春から夏，夏から秋，冬から春，いつの時期にも季節の移り変わりはある．しかし，その中でも秋から冬の「晩秋」は，私にとって他とは異なる．

最も，細かく言えば，「晩秋」にも日一日と変化があり，同じ「晩秋」と表わしても，そこには微妙な変化があると思っている．一部分一部分を切り取ると，そこはもう同じものではない．

そのように，秋に冬が少しずつ浸透していく季節「晩秋」が，私にとっては最も心地よい．そしてこの「晩秋」の変化を表現するにあたって，ピアノの音色でテーマのメロディを演奏するのが，一番心地よく感じられた．

所属および連絡先
＊大阪千代田短期大学

この曲は，以前に自身が作曲したものを，今回，ピアノを中心としてキーボードを加えた再編成による編曲を行ったものである．キーボードを様々な音色で登場させ，ピアノコンチェルト風のアンサンブル作品として書いた．これまで筆者が，保育者養成校におけるピアノの指導，音楽表現を研究している観点からも，本学で学んでいる学生たちが演奏できるよう，生の楽器ではなく，キーボードを使うアレンジとした．キーボードは，生の楽器を体験していなくとも，音色一つで各楽器が体験できる．もちろん，楽器ごとにキーボードでも奏法を習得することにより，生の楽器に近づくことができる．もちろん，本物ではない．しかし，近づくためには，その楽器の音の鳴らし方，得意なパッセージなどを理解し，奏法研究することができる．

そこには，本学学生をはじめ，同じ保育者養成などでの音楽経験でできうる，音楽を専門に学んでいる学生でなくとも演奏が可能となるよう，技術的に難しい奏法はなるべく避け，鍵盤演奏の比較的初心者でも演奏できるものを目指した．そのため，両手奏になる部分では，両手が同じ動きをするどちらか一方の音符が止まっている（休符や長音符など）時に，もう一方の手を動かすなどを配慮した．また，保育者養成におけるピアノのレッスンで課題となっている，例えばアーテュキレーションやタッチによる強弱，フレージングなどが練習できるよう，曲の中には取り入れるようにした．

イントロ 4 小節は，金管楽器によるファンファーレをイメージしている．ノンレガートで演奏されるのはトランペットではなく，フリューゲルホルンで丸い音を想像している．フリューゲルホルンに明るく加えられたホルン，チューバで構成しており，Ｅｂの明るい和音より始まるが，主題の g moll へつなげる．

5 小節目からがテーマの Ａメロ 8 小節が始まる．ここでは，ピアノが哀愁漂うメロディーを奏でながら，ストリングスがバックに薄く重なっていく．15 小節目の A′ では，多くの音が絡み合いながら，ピアノのソロとはまた趣の異なるサウンドを創っていく．23 小節目からのＢメロでは，A′ メロでの重なり合いではなく，音の厚みをつけたり，細かい音符でスケールやクロマティックを入れたメロディーでサビに向かって音を膨らませていく．

31 小節目からは，サビ前の最も盛り上がる箇所である．Ｂメロで少しずつ盛り上がってきたが，一旦，この 31 小節目で，ふっと緩ませたい．そのことにより，サビに向かってのエネルギーが蓄えられ，大きくクレッシェンドできる．36 小節目からのサビでは，これまでのベースパートとは異なり，大きく動かす．また，ピアノの左手も低音を響かせ，幅のある音程を取ることにより，よりスケールの大きさを表現しようとする．

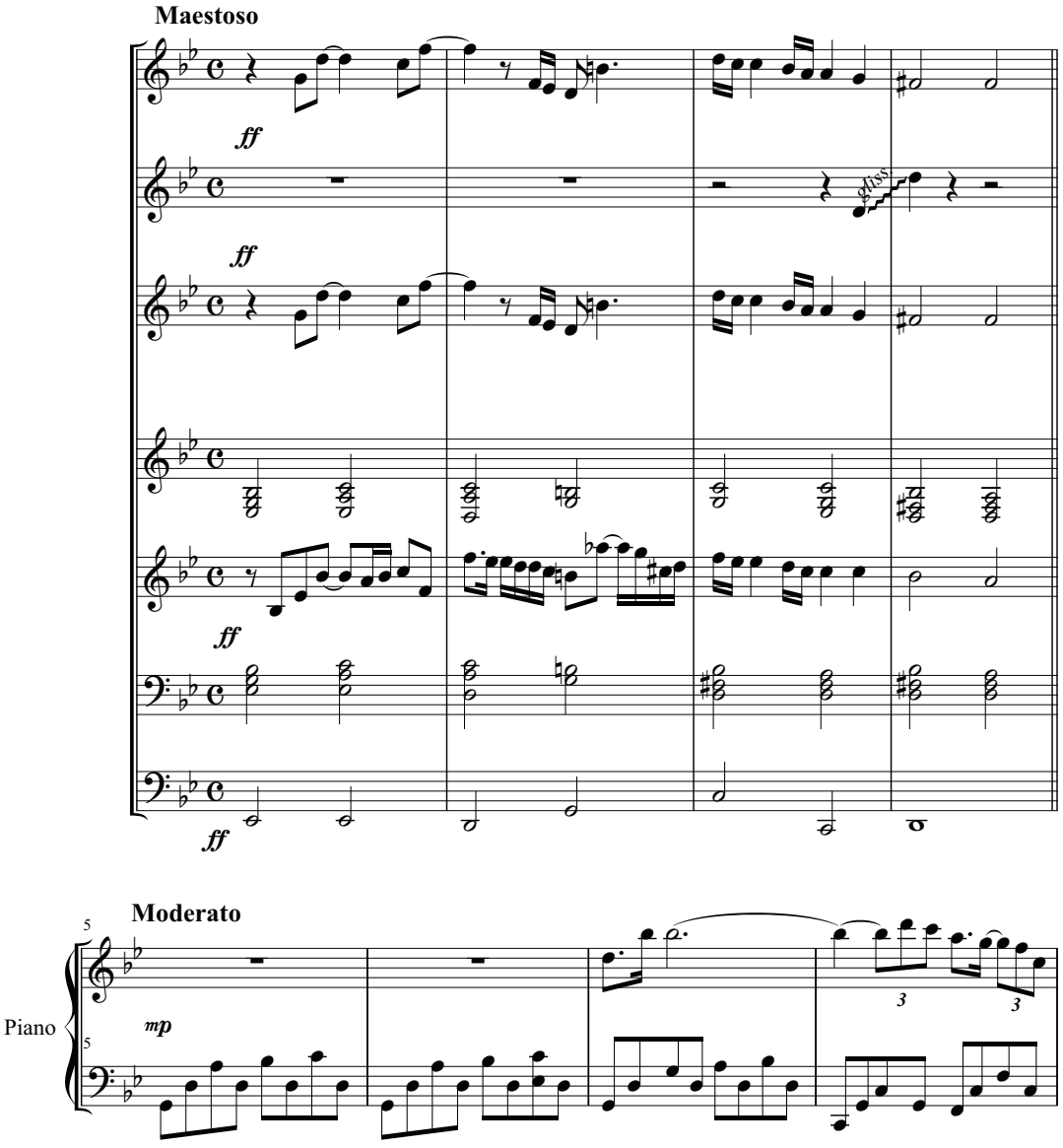
サビの後の 45 小節目からも音数を，最小限に減らし，メロディーを引き立たせる．49 小節目からは，再びイントロと同様にフリューゲルホルンとホルン，チューバのみの金管楽器でのファンファーレ風の間奏が再現される．しかし，イントロよりは主題の後のファンファーレのため，音の絡み合いも大いに行うことにより，次のサビが 1 回目よりもさらに膨らんでいく．

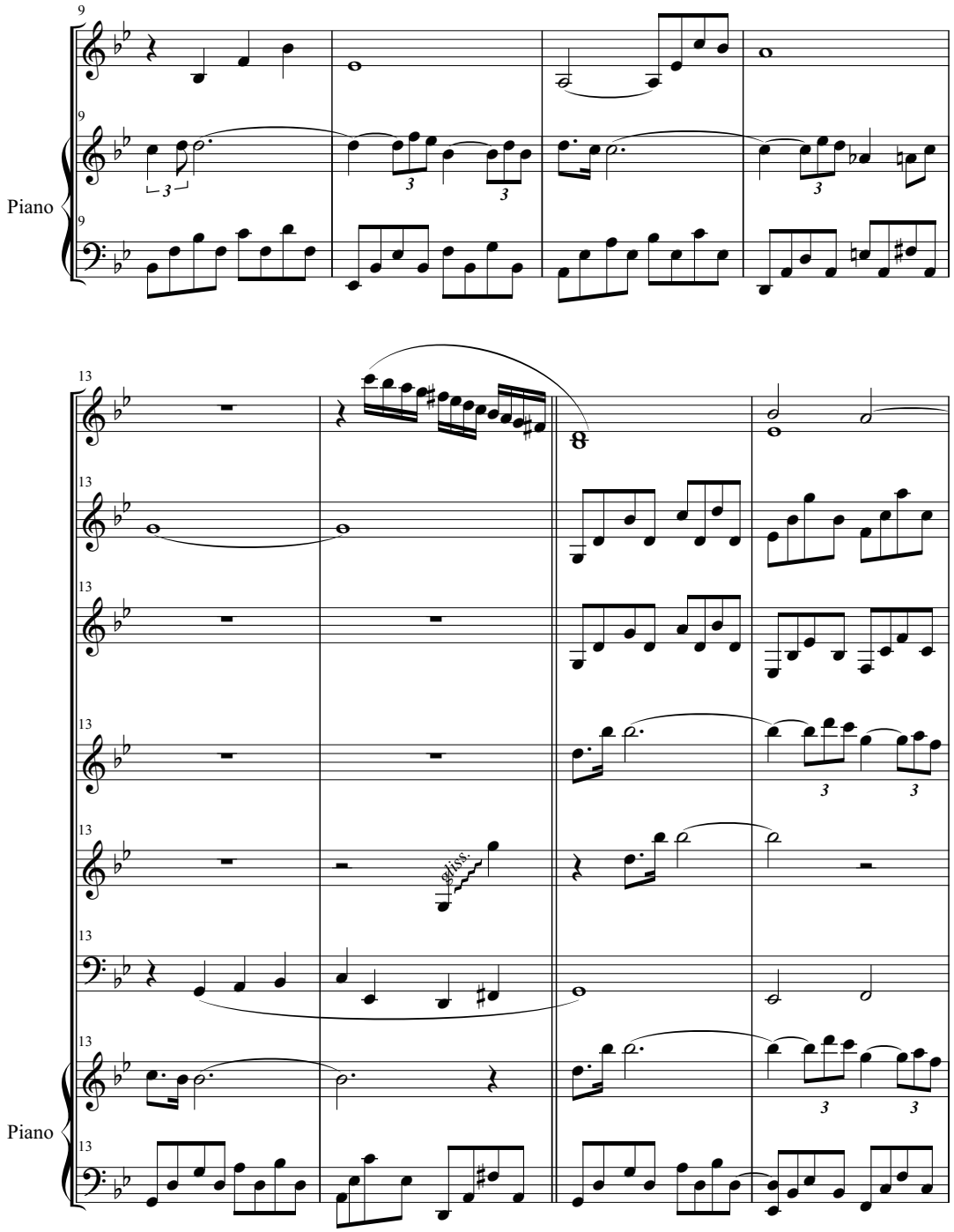
再び，サビに入り，大きなスケールを目指す．そして，コーダに入る．コーダでは，ピアノのソロにより少しずつ音が遠のいていく様子を表した．

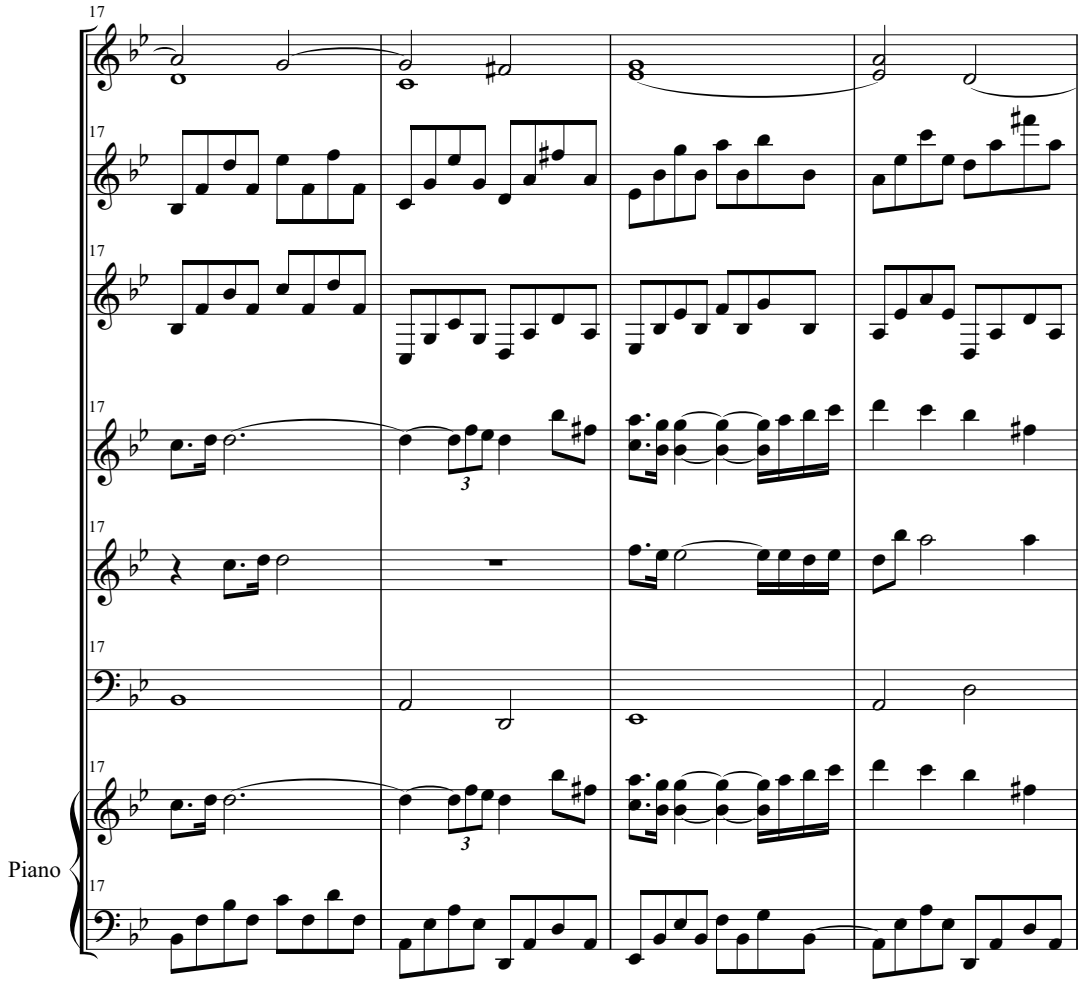
ピアノの後に残るストリングスは，本当に薄く，優しく消えゆく音になることで，「季節(とき)は過ぎゆく」．

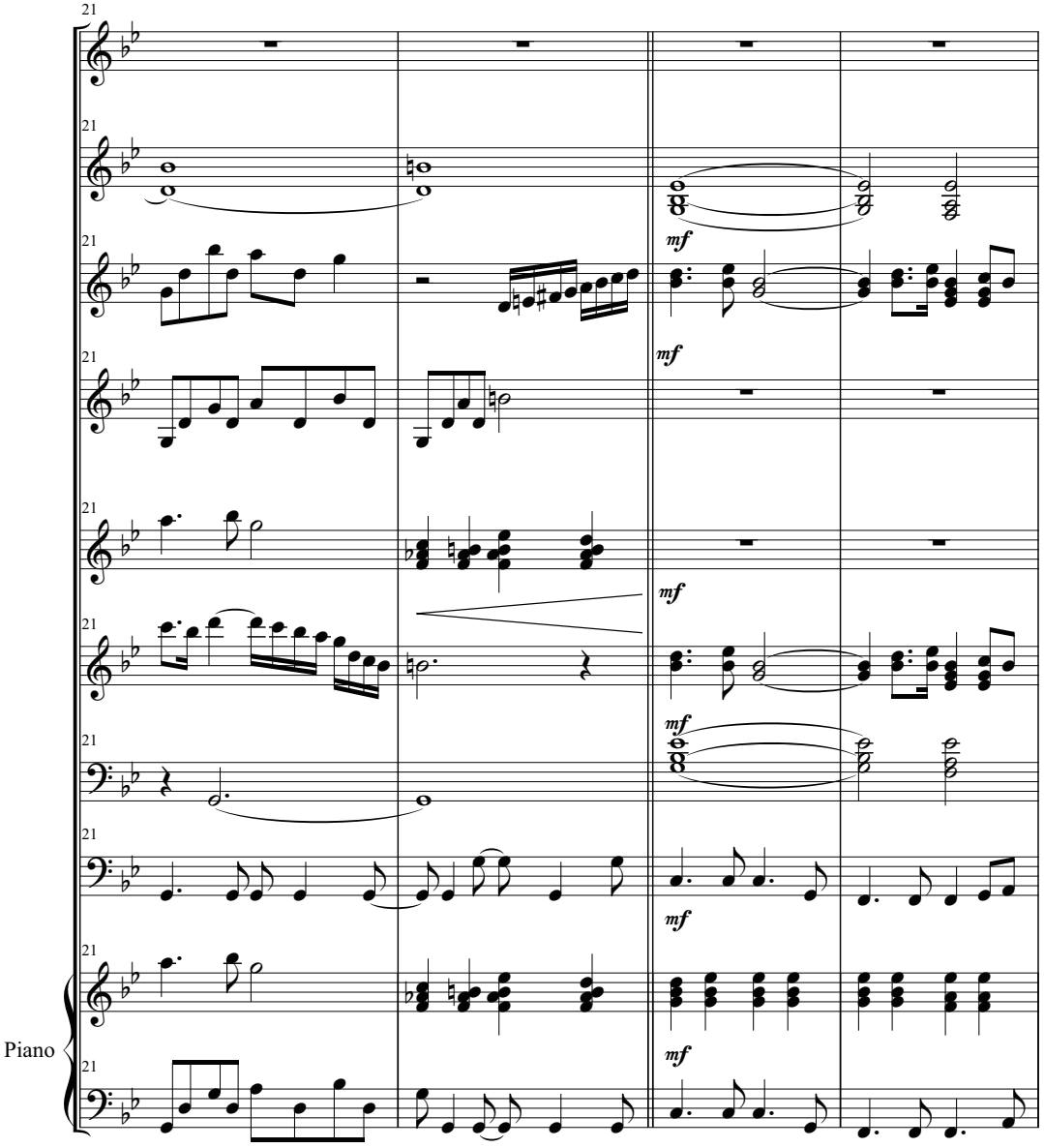
晩秋～季節は過ぎゆく～

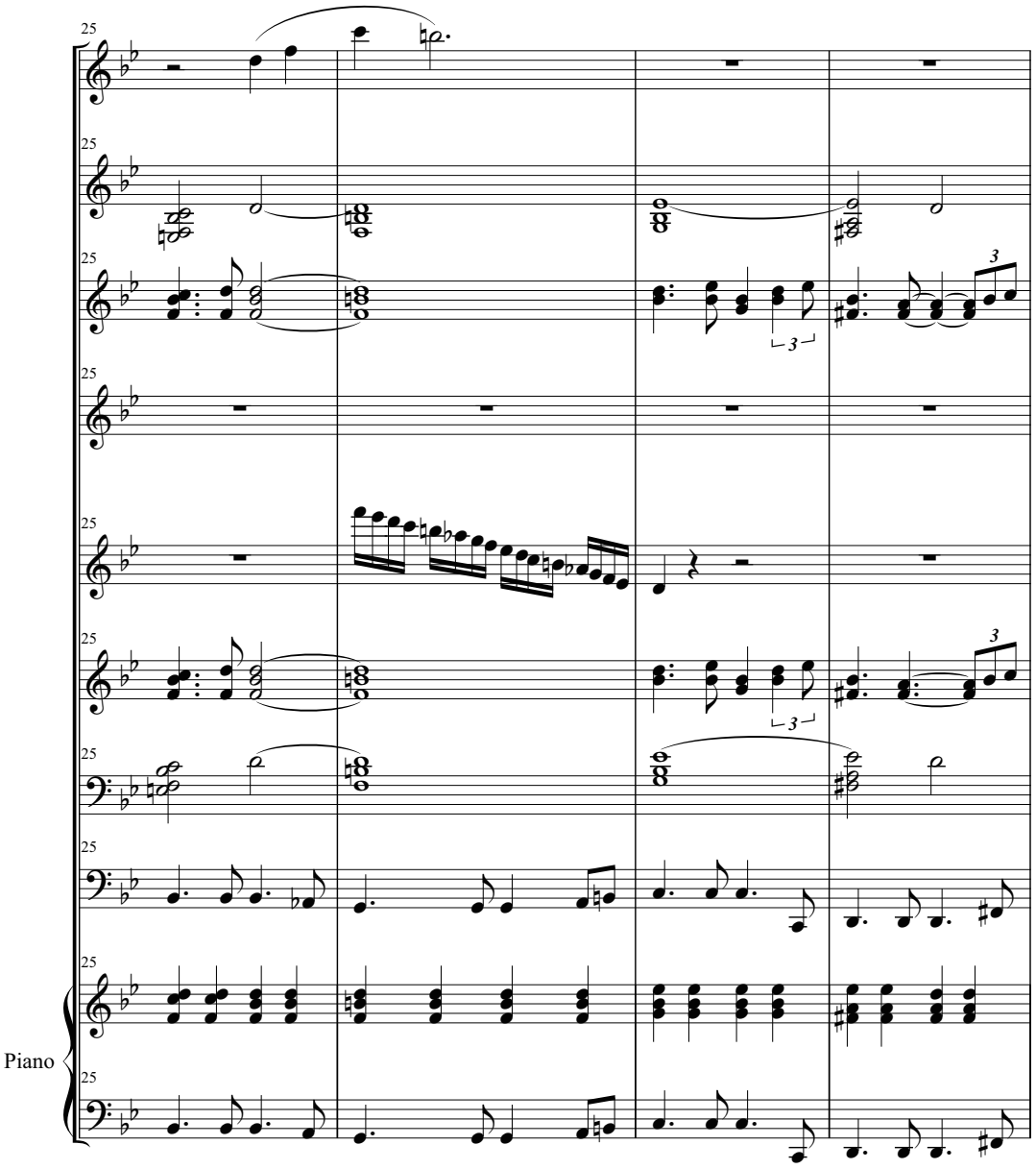
comp.Yukari yori

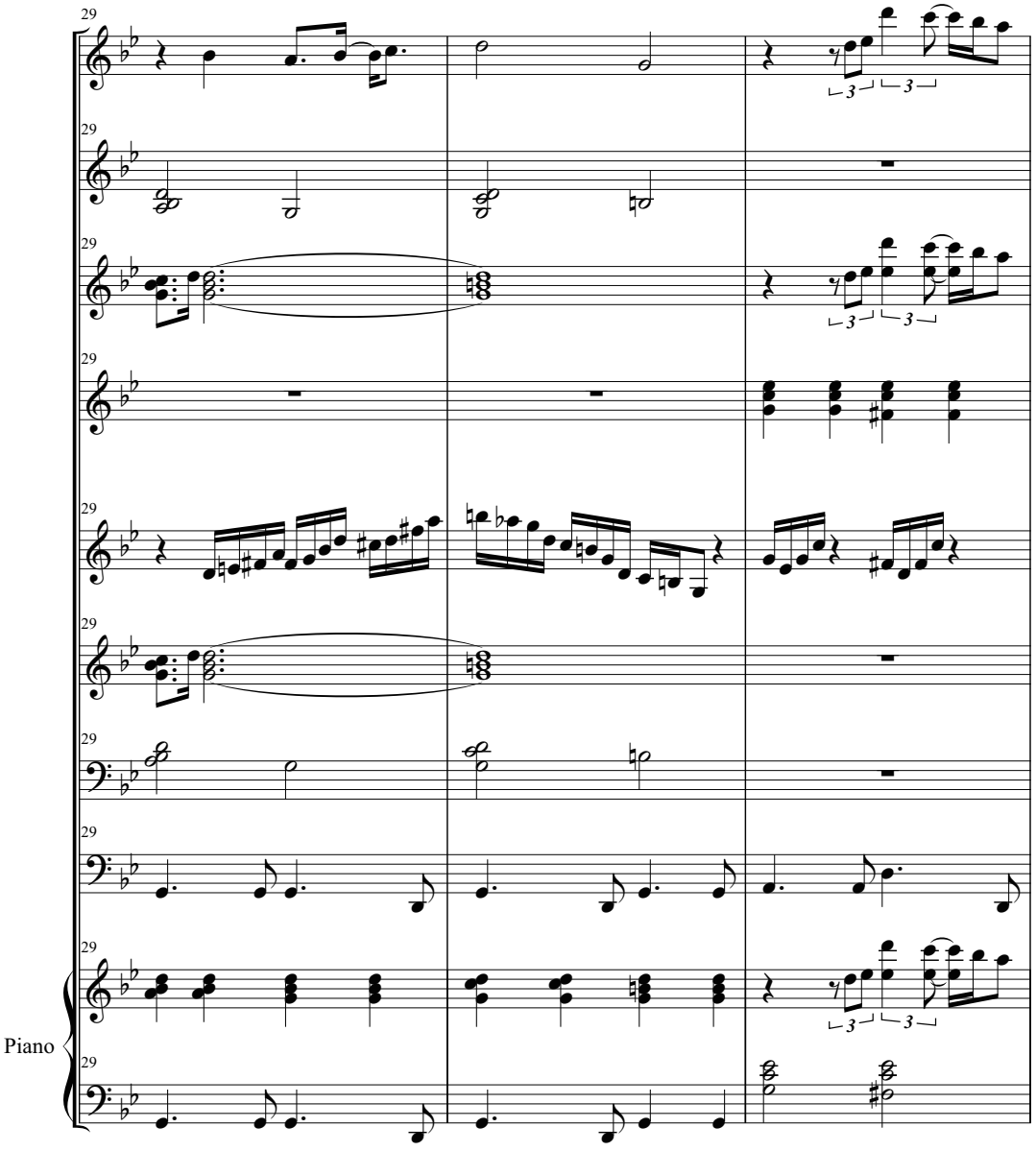


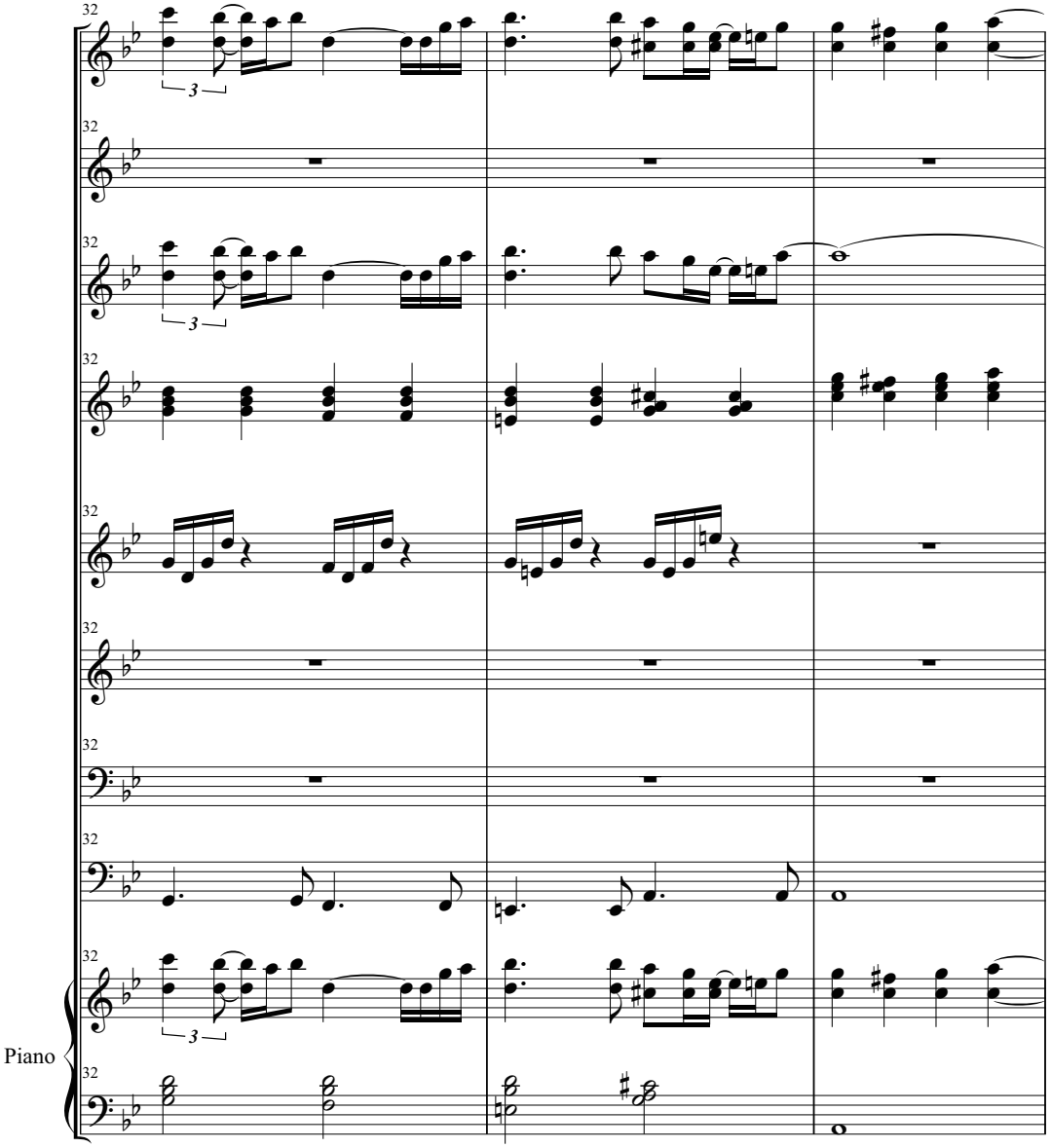

Piano
Piano
gliss.

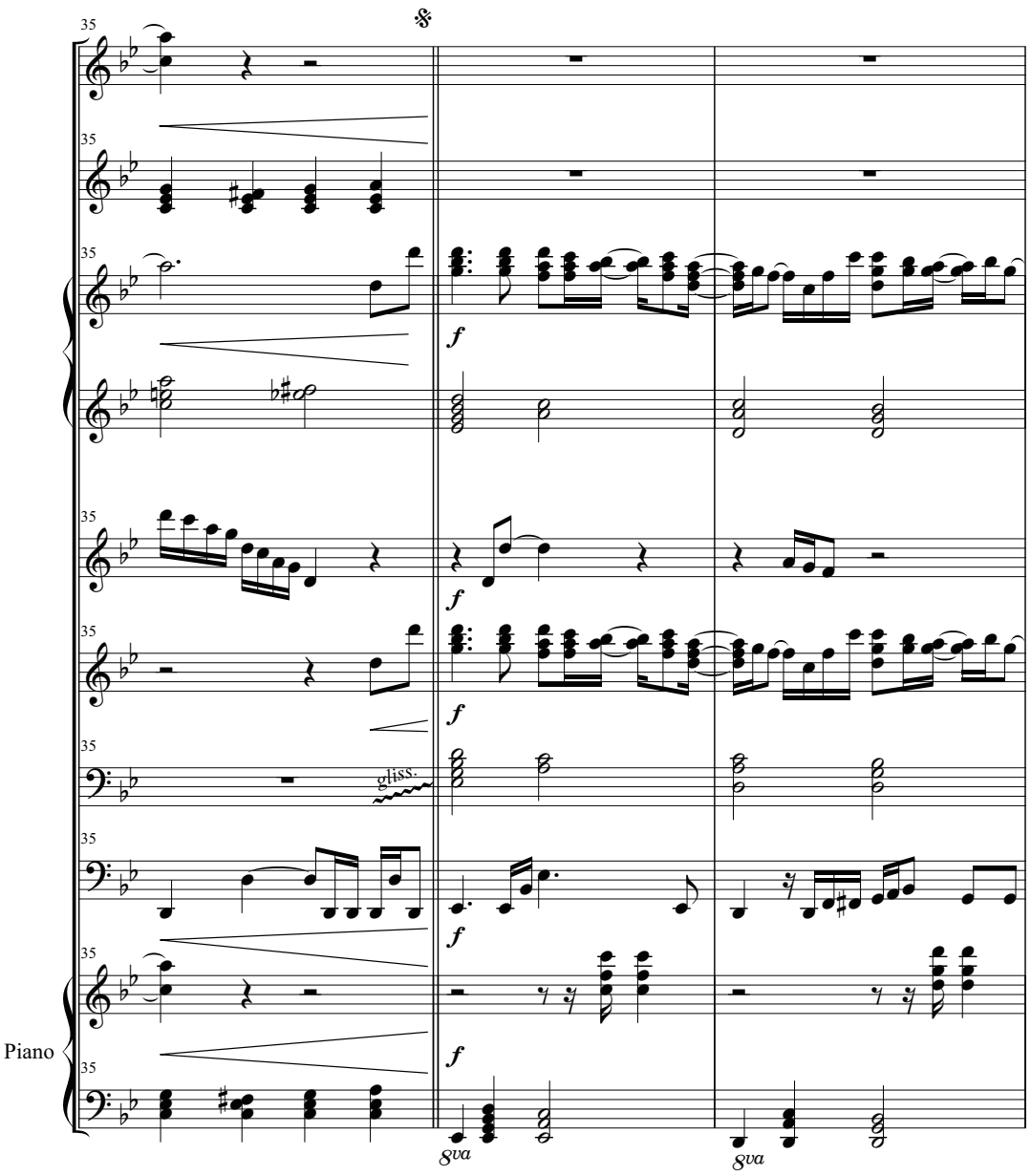

17
17
17
17
17
17
17
17
Piano
17
3
3

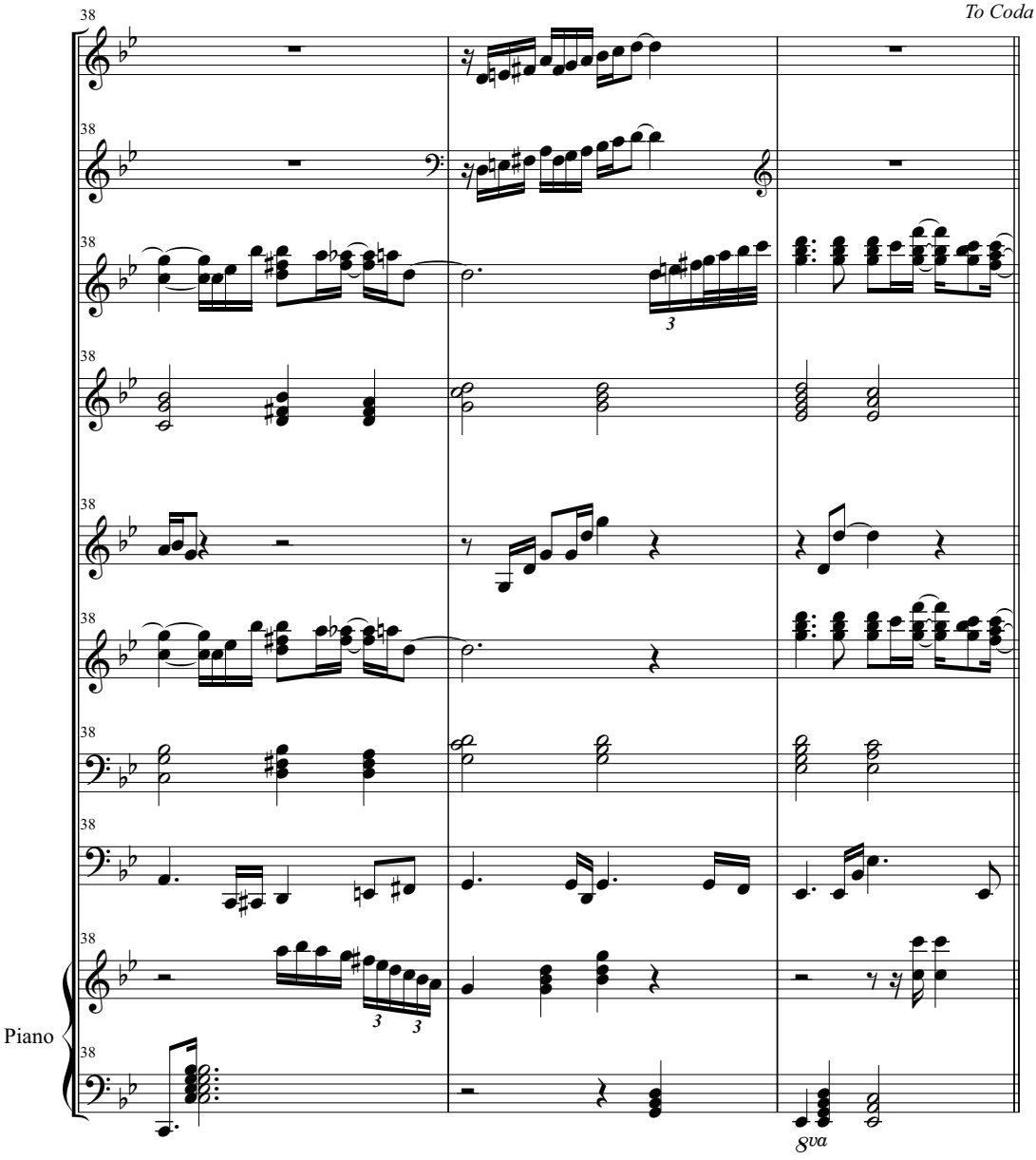

21
mf
Piano

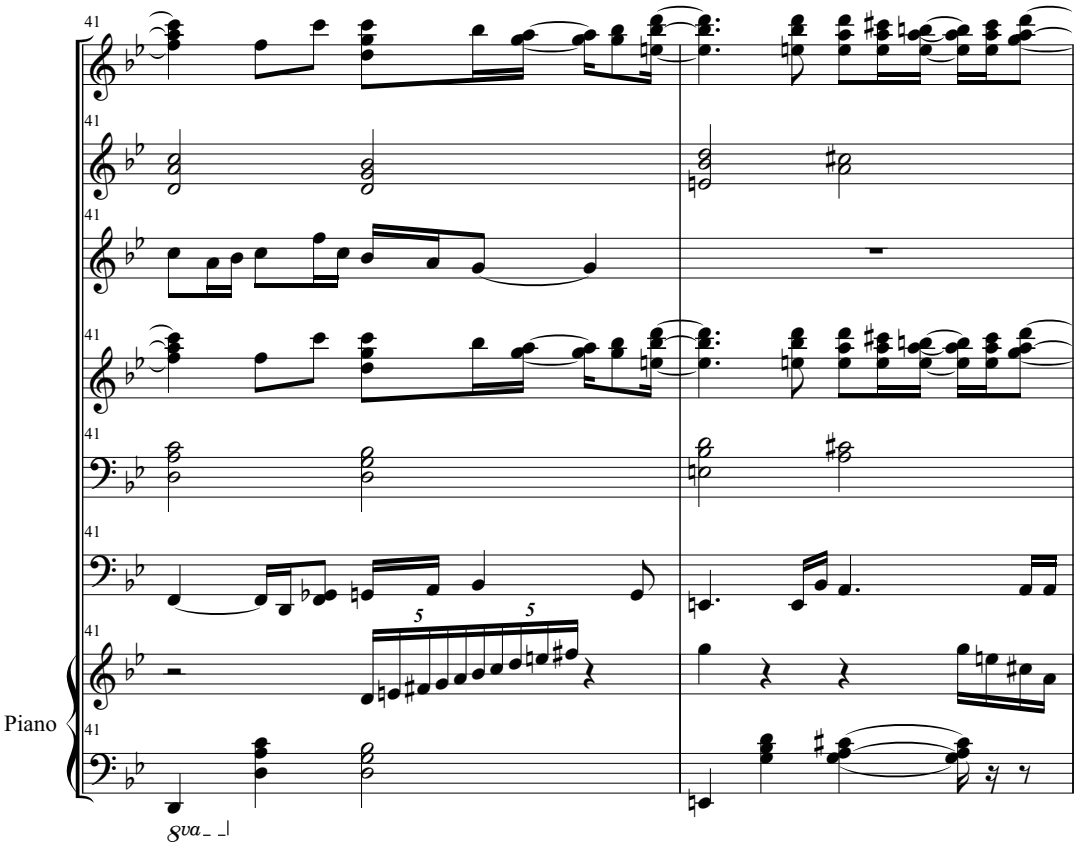

25
Piano

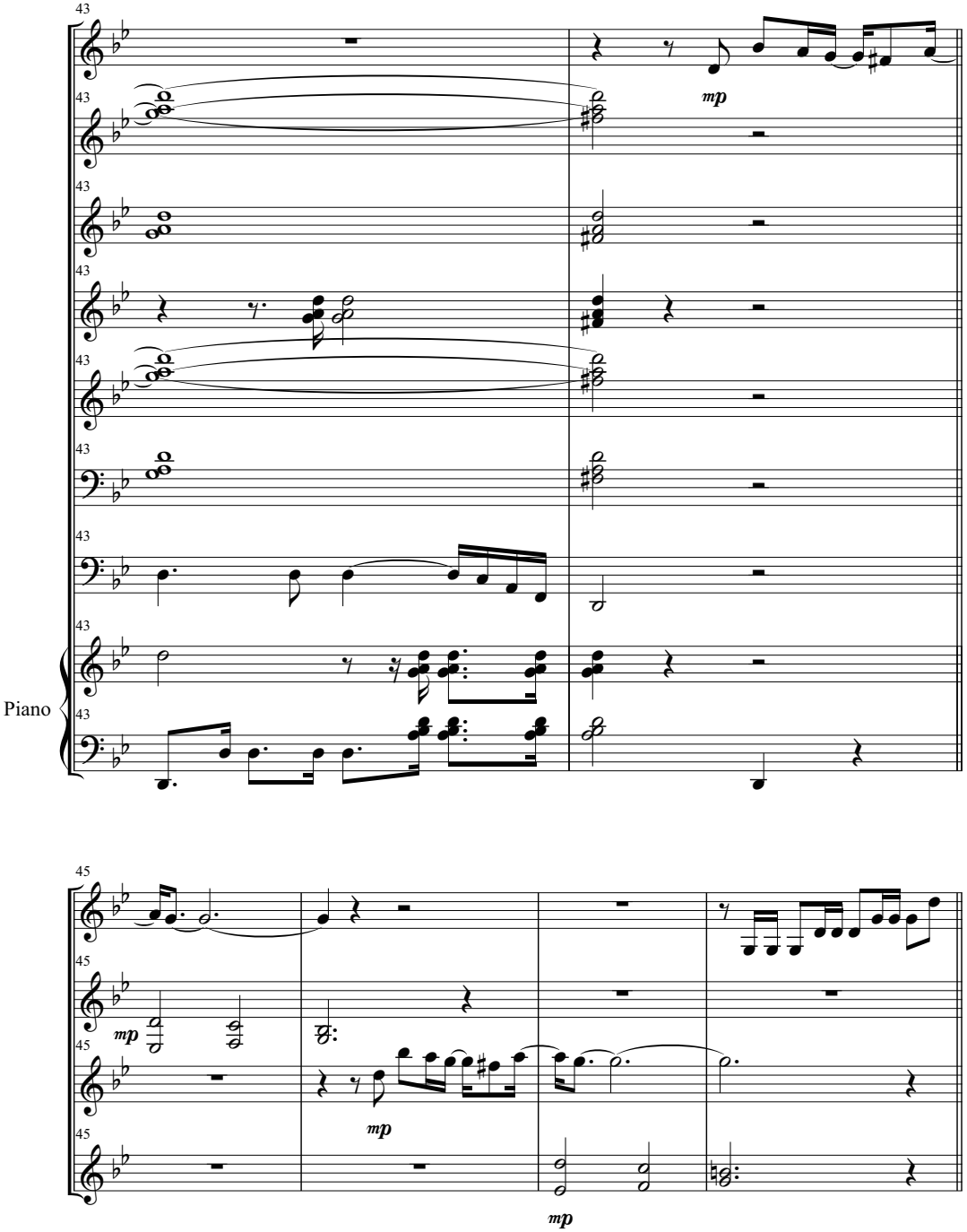

29
Piano

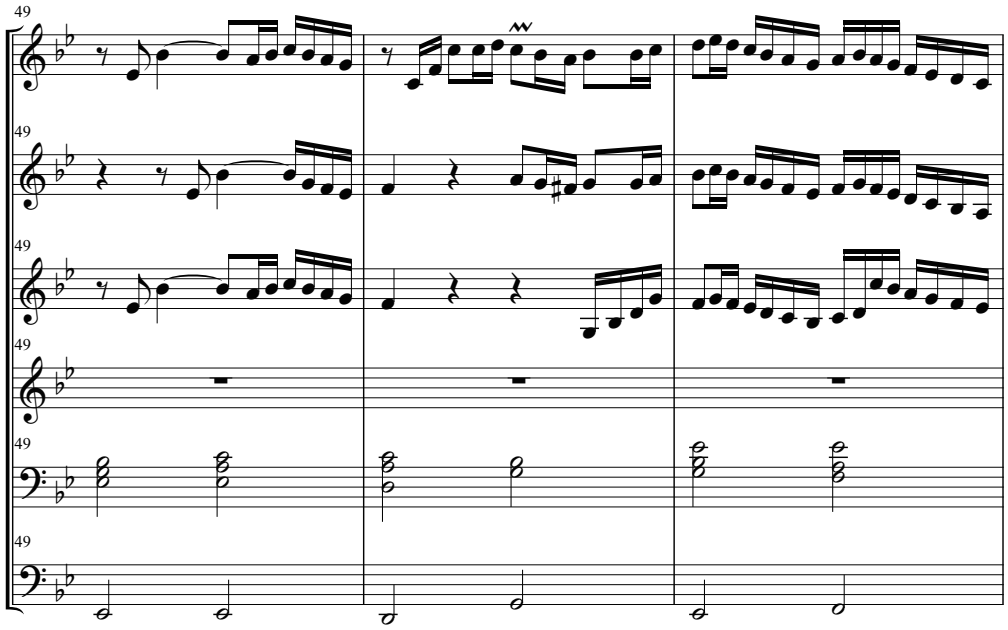

Piano

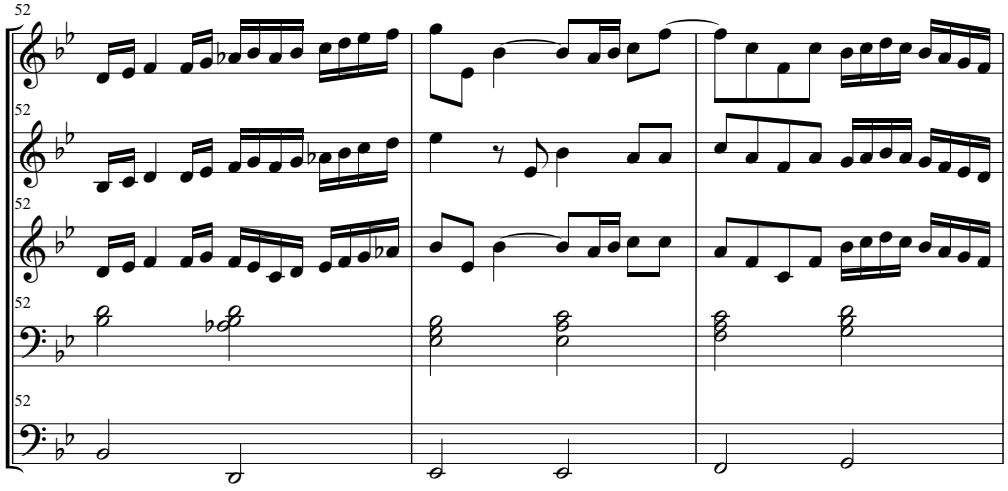

35
gliss.
Piano
8va
8va

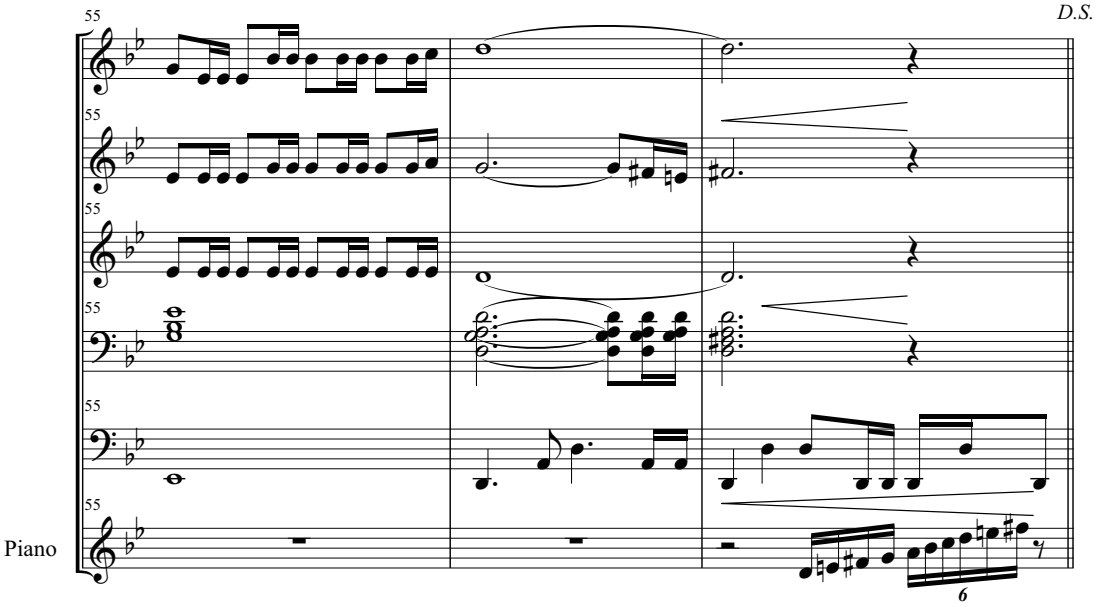

To Coda
38
Piano
3
3
3
8va

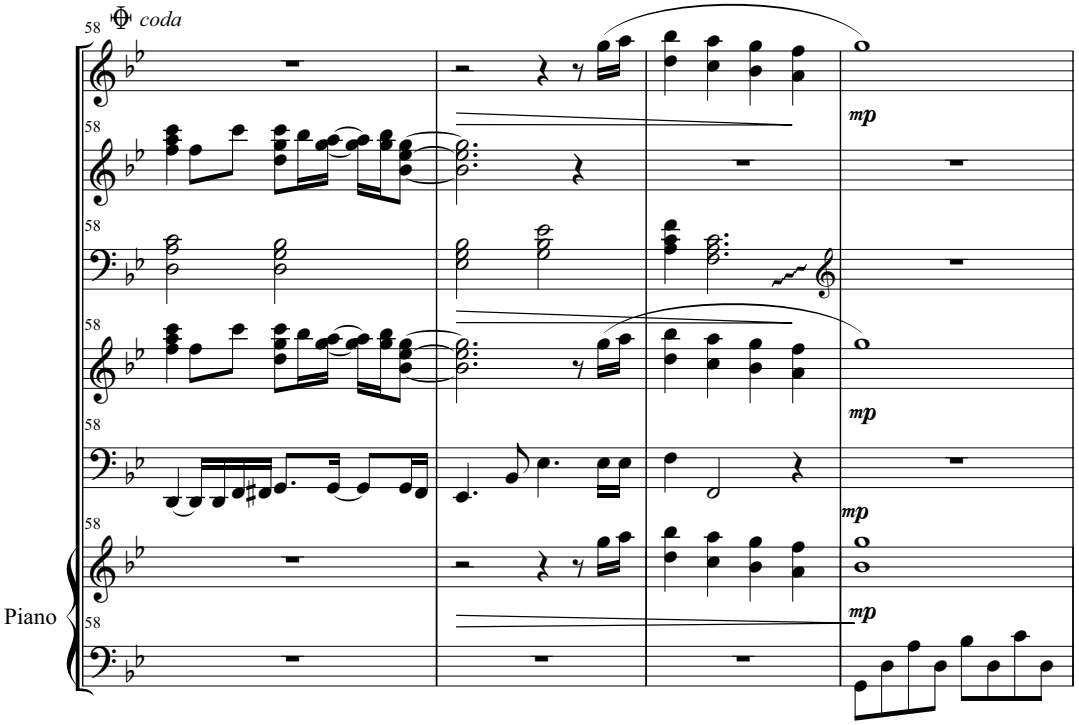

41
41
41
41
41
41
41
41
Piano
5
5
8va

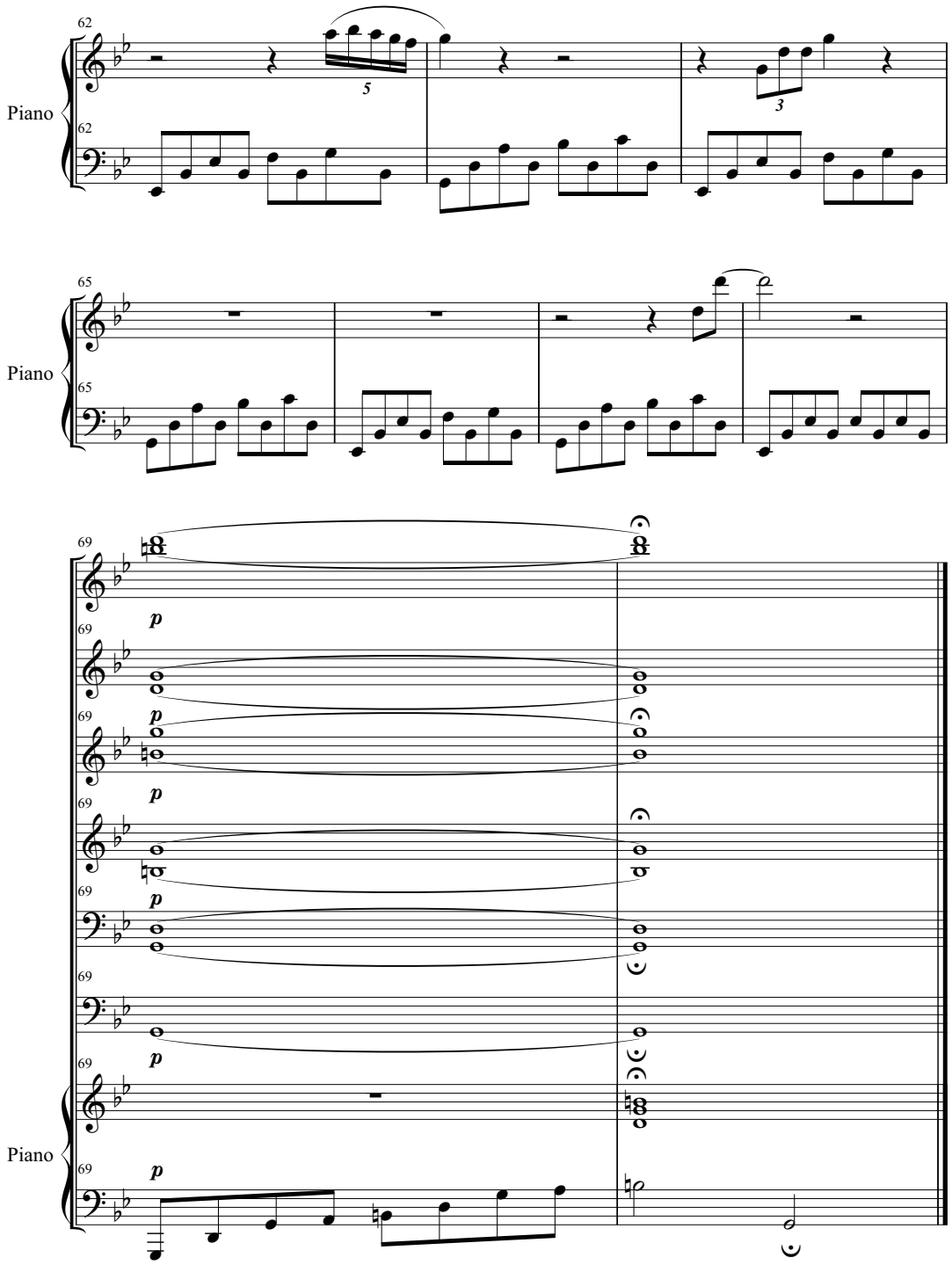

43
mp
Piano
45
mp
mp
mp


49
49
49
49
49
49


52
52
52
52
52


55
D.S.
Piano
6


58
coda
mp
Piano


62
Piano
62
5
3
65
Piano
65
69
p
69
p
69
p
69
p
69
69
p
69
Piano
69
p